



とみすはら

No.52

平成26年3月1日

富洲原地区社会福祉協議会

編集 文化広報部



富洲原地区の夏まつり



一体感ある富洲原地区

富洲原地区社会福祉協議会会長 藤田 信男

富洲原地区の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素は富洲原地区社会福祉協議会発展のために、ご理解ご協力を賜り、たいへん有り難く感謝致しております。

当協議会も発足してから、今年は40年の節目を迎えます。

紙面をお借りして重ねて御礼申し上げます。

日本の社会においては、少子高齢化、核家族化が叫ばれてから随分と時間が経って来ましたが、これらの対策も決して良い方向に進んでいるとは思われない状況です。しかし、その中で私達、富洲原地区

で出来る事は何かを考えていかなければなりません。3地区がより一層、強い協力の下、一体感を持って、社会福祉の充実を図りたいと思います。

地区としては「弱者や高齢者（大先輩）に優しい地域」「子どもたちは地域の宝物」「地域のために少しでも役立ちたい」気持ちを持って、安全で安心して住み良い町づくりを目指して行きたいと思います。

その為にも、先ずは従前の様に3地区が一体となり「合同運動会」を開催出来るように、皆さんと一体になって協議し前に向かっていきたいと思っておりますので、皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。

富洲原地区のシンボルマーク



昭和56年11月に市民センターが新築されたことを記念して、地区で公募された作品の中から選ばれ決定しました。

「前進・向上と親睦」をテーマとしたマークで、富洲原のカタカナ「ト」をもとに、富田一色、天カ須賀、松原の三地区「くらし」「まなび」「ふれあい」を三つの輪にして、たえず未来に向かって前進を続ける富洲原であってほしいと願って考案されました。

太子堂



富田一色の花祭り

4月8日、22日

4月になると、富田一色地区では二つの「花祭り」が開催されます。一つは4月8日、一色山観浄寺で、釈迦の生誕を祝福する仏教行事として、二つ目は太子の命日4月22日太子堂で「花祭り」の提唱者、聖徳太子像のご開帳があります。どちらも花御堂（釈迦誕生のルンビニ園の花園を表す）に金属の幼仏像をまつり、甘茶が参拝者により像に灌がれます。太子堂では白い像の作り物に花で飾った輿に誕生仏を乗せパレードする時期があったそうです。



一色山観浄寺での甘茶かけ

けんか祭り（大念仏行事）

8月14日、15日

アソーレ（精霊）の掛け声で鉦を打ち鳴らして練りながら、飛鳥神社に入ろうとする大鉦を5又は4個の太鼓が防いで、激しく揉み合って阻止する。

揉み合いながら、最後に飛鳥神社に練り納める行事である。

町練り 8月14日

本練り 8月15日午後1時から3回

（北部、中部、南部＝順番は毎年変わる）



けんか祭りの由来は、「仁治3年（1242）7月14日長光寺別當満月上人踊念佛始是者佐原豊前守為鎮怨靈亦一切為聖霊也」と記されており、非業の死を遂げ、民衆を悩ませたこの地の地頭、佐原豊前守の怨霊を鎮めるために、仁治3年に富田長光寺（今の長興寺）を興した満月上人が堂前に角塔婆を建て、松明を焚き、怨霊退散の祈禱をした。また、その霊を慰めるために、上人は民衆とともに長興寺（富田）と一色山観浄寺（富田一色）の間を鉦を叩き練行した。

（東富田町 渡辺紋左衛門氏所蔵「富田六郷氏神記」から引用）

宮参り

8月15日の夕方から行われる。

富田一色の各町からそれぞれの町名を表した高張提灯を先頭に子どもたちは弓張提灯をかざし、町内の氏子が参加する。

オンマカヤートーコースで始まる伊勢音頭道中歌を歌いながら一路飛鳥神社へと行列が続く。

浦安の舞

8月15日

富田一色では盆大祭の折、飛鳥神社にて宮守町より選出された女子4名で浦安の舞を奉納する。

昭和30年代頃から行われており、練りは男性・男児しか参加出来なかったため、女兒にも参加出来る場をと約50年に渡り続いている神振行事である。

神楽の歌詞は昭和8年に昭和天皇が詠んだ「天地（あめつち）の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに渡たぬ世を」である。

現在は子どもの数が減少しており宮守町のくくりを取り払って考えていなくては舞の存続は危まれている。



秋祭り ガニ祭り

10月13日

毎年10月13日、ほとんどの家が漁師であったため、伊勢湾で獲れたワタリガニを神前に供え、各家庭では押しずしを作って親戚のものを招き、祭り気分を味わったものである。ちょうど秋のイワシ漁に入る前でカニの季節であるのでガニ祭りと呼称した様である。

節分 2月3日

節分は、季節の分かれ目の意味で、元々は「立春、立夏、立秋、立冬」のそれぞれの前日をさしていた。

節分が特に立春の前日をさすようになった由来は、冬から春になる時期を1年の境とし、現在の大晦日と同じように考えられていたためである。

立春の節分に豆をまく「豆まき」の行事は、「追儺ついな」と呼び、中国から伝わった風習である。

富田一色観浄寺においては、2月3日午後4時50分と5時5分の2回豆まきが行なわれ、たくさんの人々でにぎわいます。



住吉神社秋祭り 10月14日

さわやかな晴天に恵まれた秋空の下、10月14日の体育の日、住吉神社で秋祭りが開催されました。

氏子総代、自治会、青年団、育成会、老人会の皆様のご協力のもと、境内の縁日コーナーでは、ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、輪投げ、射的、千本釣り、また老人会（きらく会）によるおてだま遊び、氏子総代の指導によりひこうき作りが行われました。

どの出し物も行列ができるほどの盛況ぶりでした。

子どもたち、お年寄りの方々もふれあいの中で笑顔が見られました。



運動会 9月29日

平成25年9月29日(日)に四日市ドームにおいて、天力須賀地区大運動会がありました。

午前には9種目、午後には8種目の競技があり、午前では小学生による50m走及び70m走、幼児による障害物競走、二人三脚、タンカ運びリレーなど、午後には綱引き、大玉転がし、玉入れなど8種目の競技が行われ最後の石取りリレーでは7組が走りGS富洲原が1位となりました。

石取り祭り 8月14日、15日

石取り祭りは、住吉神社で山車のお祓いを受けた後、宮司さんの太鼓を合図にゴンゴンキチンと天力須賀の熱い2日間が始まります。

今年は、5台の山車が揃ってお祓いを受けました。

14日は、町練り・15日は、本練りです。

本練りは、住吉に集結して、区長さん・早川議員・青年団団長のあいさつで始まります。10年くらい前に、ある青年たちが一体感をたかめようと始めたものが、今では、全町の青年によるパフォーマンスとなり「野球するなら〜」の声高らかに練り広げられます。勇ましい掛け声に皆の気持ちがひとつになり、町の人々も子どもから大人・おじいちゃん・おばあちゃんまでお祭りへの熱い血が騒いできます。

青年たちの声から始まった今の祭りの体制が、伝統の祭りを大いに盛り上げて新しい伝統を作っています。



天力須賀自主防災隊技術部隊

毎月第4日曜日に消火・救急等訓練

自主防災隊技術部隊は、各町から1〜2人ずつ選ばれ総勢31人（現在は2人欠員）で構成され、毎月1回天力須賀公園で消火訓練や三角巾の訓練、発電機、ポンプの駆動、防災マップ作成等、非常時に備えて真剣に訓練を重ねています。又、技術部隊とは別に各町の自主防災隊は、30人前後で構成されていますが、隊長はじめ班長も1〜3年で交替しているのが現状で、災害時の適切・迅速な対応が出来るか非常に不安な状態です。

そこで技術部隊が、各町自主防災隊と共に先頭に立って活動できるようにと願って訓練を積んでいますので、各町自治会長はじめ自主防災隊長及び隊員の皆様の自発的な参加を希望しています。

技術部隊は、強い結束力で、隊員全員がいざという時に備えて長年に亘って活動しています。今後若い人が技術部隊へ入隊し、技術を継承し災害に強い町作りに貢献してほしいものと願っています。《命を守る》という事に真剣な方は、未経験者でも歓迎します。各町の自主防災隊長が自治会長へご連絡下さい。

総合防災訓練 11月10日

11月10日(日)に富洲原地区総合防災訓練が行われました。

午前8時の避難サイレンを合図に、天力須賀地区の津波避難ビルに指定されている富洲原中学校へ行き、この夏設置された避難用屋外階段を使って、校舎屋上へと上がりました。

階段は十分な幅があり、屋上には高い手すりがつけられていて安心して登ることができました。

その後、富洲原小学校へと移動し、展示物や体験コーナーなどを通して、防災意識を高める良い経験ができました。この訓練はNHKで放送され、多くのみなさんの関心を集めました。



聖武天皇社

富洲原の歴史で最も古い昔話では奈良時代に聖武天皇が伊勢国に出向いた際に朝明郡の松原村に立ち寄ったということから鎌倉時代に聖武天皇社が建てられました。



白玉龍神社



力石

神社境内には蛇の白玉龍の神様を祀る商売繁盛の白玉龍神社と力石という石が本殿の右側にあり、800年前から若者達が体力を試そうとして競いあい持ち上げました。

石喰松と呼ばれる石を抱えているようなめずらしい松もあります。大みそかと元旦の間の年越しの時間には現在でも甘酒が振舞われています。

普通にげなく通っている神社かも知れませんが、そんな事を思い出しながら立ち寄ってみるのもおもしろいかも知れませんね!!



石喰松

松原地名の由来

松原は聖武天皇縁の地として古くからその名が知られている。

続日本紀に「丙午、赤坂より発して朝明郡に到る。戊申、桑名郡石占の頃宮に至る」とある。

奈良時代の天平12年(740)10月、藤原広嗣が九州での争いを起したので、聖武天皇はこの争いにまきこまれるのを避けて、都をはなれ伊勢(今の三重県)を通って美濃に行かれた。この途中、11月23日に朝明の郡家に到着し、そこで二泊された。この朝明行宮で詠まれたお歌が万葉集巻第六にのせられている。

「妹に恋い吾の松原見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る」

(万葉集千三十番目の歌)

この歌は都に残してこられた皇后を恋しくなつかしく思いながら松の林を通して海辺の方をながめると、干潟でえさをあさっていた鶴が大きな声で一声鳴きながら飛び立っていった様子を詠まれたものと思われる。「吾の松原」については安濃の松原であり若松の松原であるなど、いろ

万葉歌碑



いろの説があってその所在は明らかでない。しかし「吾の松原」は歌の流れによると「三重郡に在り」とあることからこの辺の松原をさすものと推定される。

この地方には、松原・松寺・高松など松の付く地名が多いが、富洲原地区の松原町はこの歌の「吾の松原」から名付けたといわれている。